

◇ **山東京伝**は舞台が主に遊里である小説ジャンル（洒落本^{しやれほん}）で人気を博した作家でしたが、風俗の乱れを嫌う**松平定信**によって処罰されました。処罰対象の一つ『仕懸文庫』の一見敵討ちの物語のように見えて実は話が遊里につながるという構成が幕府の怒りを高めたのかもしれませんが。山東京伝は手錠をかけて50日過ごすという屈辱的な刑罰（「手鎖^{てぐさり}」という）を受け一時的に創作意欲を失ったようですが、やがて黄表紙、合巻（長編の黄表紙＝「合巻」は黄表紙が何冊分も合わさったという意味）、読本といった他ジャンルでの創作を再開、多くの作品を残しました。江戸時代に処罰された作家として教科書に出てくるその他の人物はみなその処罰による精神的苦痛を原因としてまもなく亡くなっているのに比べるとその復活は特筆ものです。

◇ **恋川春町**は、風刺の効いた、あるいは面白おかしさを売りとする絵入り小説・黄表紙の人気作家でしたが、**松平定信**にその作品に目をつけられて呼び出されます。恋川はその呼び出しに応ぜず隠居、まもなく亡くなります（自殺説あり）。恋川春町の代表作は一般に『**金々先生栄花夢**』とされ、図表にもその作品が載っていますが、処罰対象となったのは『**鸚鵡返文武二道**』^{おうむがえしぶんぶのふたみち}という名の黄表紙でした。生真面目な松平定信は武士に対し盛んに文武両道を説いていました。「口を開けば『ブンブリョウドウ、ブンブリョウドウ』と一つ覚えみたいに言いやがって。あいつ（松平定信）はオウムか！」みたいなノリに、幕府に対する侮辱と見せしめにされたのかもしれませんが。

◇ 江戸時代の小説は江戸時代にいた人物や江戸時代に起こったできごとに題材をとっていることも多いのですが、その内容が江戸幕府に対する批判や侮辱を含んでいると捉えられることを避けるため、時代設定を変えていたりすることがあります。『鸚鵡返文武二道』も時代を室町時代に設定していましたが、見逃してもらえませんでした。『**仮名手本忠臣蔵**』も時代を室町時代に設定し、浅野内匠頭は「**塩谷判官**」^{えんやはんがん}（高師直と対立したとされる実在の武将。赤穂は塩の産地からの連想。）、大石内蔵助は「**大星由良助**」^{おおほしゆらのすけ}（語呂合わせ）、吉良上野介は「高師直」（悪役イメージからか？）と名前を変えて演じられました。

◇ **文人画**または**南画**の代表作とされる『**十便十宜図**』が**図表 P.198**に載っています。**池大雅**が『十便図』、**与謝蕪村**が『十宜図』を描いた合作です。これは中国のある人物の別荘住まいを題材に**田舎暮らしの「便利なところ」**を十枚に（**十便図**）、「**宜しきところ（いいところ）**」を十枚に（**十宜図**）それぞれあらわしたものです。図表にはそれぞれのうち代表的な絵が選ばれて載せられています。池大雅の『十便図』から選ばれたのは「**釣便図**」（田舎だったらすぐに釣りができるよ、の図）、与謝蕪村の『十宜図』から選ばれたのが「**宜秋図**」（秋は紅葉で美しい風景が楽しめるよ、の図）です。ほかに何かあるのか気になる人は、**十便図**、**十宜図**で画像検索してみましょう。

◇ **教科書 P.226①**にその業績の一端が紹介されている**平賀源内**は江戸時代を代表するマルチタレントでした。教科書注を見てもわかるとおり、科学にも文学にも秀でた人物で、江戸後期のドラマには欠かせない脇役です。その業績に比して主役扱いされることが少ないのは、あまりにも多方面にわたって広く業績があることと、その最期が殺人犯として逮捕され、獄死したということにあるのかもしれない。

もっとも有名な業績の一つが「**エレキテル**」とよばれる摩擦起電気を修理して人々に紹介したことでしょう。エレキテルとはハンドルを回して静電気をため、火花を散らせる装置です。この修理をしたのち源内はその原理について、中国の陰陽思想と仏教の理論を用いて説明しているとのことで、要するに原理は分かっているまま復元に成功したということのようです。エレキテルを見に来た見物客も火花が散るだけの地味な見世物にすぐ飽きて下火になったそうです。

平賀源内の詳細（コピーライターのはしりであるとか、日本初のCMソングをつくったとか、イベントプランナーとして実力を発揮したとか）は興味のある人は調べてもらうとして、**平賀源内の葬儀**を執り行った**杉田玄白**が源内に贈った碑銘「**嗟非常人、好非常事、行是非常、何死非常**」（ああ非常の人、非常の事を好み、行いこれ非常、何ぞ非常に死するや）は平賀源内を語るときには欠かせないフレーズとなっています。

◇ 急に騒がしくなった弟子たちに保己一が「**どうしたのだ。**」と尋ねると、弟子の1人が「先生、風で灯りが消えました。何も見えません。」と困った様子で答えます。それを聞いた保己一は「**そうか。目明き（目が見える）**というのは**不自由なものよ**のう」といたずらっぽく笑って答えたということです。